

子育て広場

小松 歩・佐久間 路子・森山 千賀子・井原 哲人・庭野 晃子・浅野 涼太・
瀧口 優*、佐々加代子**

活動実績の概要

1. 取り組みの経過

新型コロナウイルスの扱いが変わったことにより、活動制限が緩和され、「地域子育て支援演習」を軸とした「あそぼうかい&世代間交流」を中心に学外での活動にも参加するなど、子育て広場の活動は全体的に昨年度よりも活発に行われた。

「地域子育て支援演習」に関しては、感染症対策を継続し、2部形式（対面）で実施した。5月のテーマは「生き物に変身！～虫になりきって自然を感じよう」とし、従来はJ棟文化創造ホールとJ14講義室の2カ所で実施していたが、5月はI13講義室と講堂を加えて4カ所に各コーナー分散させ、参加者が密にならないようにした。当日参加者は子ども27名、保護者25名、計52名と、各回は少なめの人数だったが、子どもたちや保護者と一緒を楽しむことができた。

7月のテーマは「暑さを吹き飛ばそう！夏を先取り 白梅えんにち」とした。感染対策として、2部制（各回60名定員）、4カ所での実施は継続し、熱中症対策として体育館の代わりにI24講義室を使つての広場となった（子ども81名、保護者73名）。11月は「さあ行こう！昔話の世界へ」として同じく対面で実施した。感染状況も落ち着いていたことから上限人数を80名としたが、定員には満たなかったものの、ゆったりと関わる事ができた広場となった。なお、今回は朝鮮大学の学生も準備から参加しての実施となった（子ども52名、保護者42名）。

1月には、「進み続ける白梅子育て広場～地域に必要とされる居場所を目指して～」をテーマにシンポジウムを開催した。1年間の活動の総括後、第二部ではグループディスカッションを実施した。武蔵野美術大学生や地域住民の参加もあり、子育て広場の今後の可能性を考えるよい機会となった。

GP学生委員会の活動としては、学内開催の活動だけでなく、地域と連携した活動を実施した。学内では、4月に武蔵野美術大学の学生も準備から参加して春のあそぼうかい「みつけだせ！しらうめのヒミツのたから」を実施した（子ども34名、保護者25名）、またオープンキャンパス時に活動説明をする他、8月には高校生も参加する形で「あおぞらひろば 夏を楽しもう！暗号を解いてみつけだせ」を開催した（子ども20名、保護者18名）。さらに白梅祭（10月21日、22日）では、miniあそぼうかい、miniほっとスペースを実施した。学外での活動としては、ルネこだいら夏休みフェスタ（8月20日）での出張あそぼうかい実施「ワッシュイ！白梅出店祭り」（子ども43名、保護者40名）、また昨年に続き小平市役所での産業祭から出張あそぼうかい開催の要請があり、11月11、12日に参加した「世界に一つだけの万華鏡を作ろう」（子ども135名、保護者129名）。さらに新たに以下の活動を実施した。2022年にブリヂストンを拠点に「小平共創コミュニティ」が立ち上がった。これは小平市の福祉団体（障がいがある子どもたちのための放課後デイサービス、福祉作業所、地域生活支援センター）や武蔵野美術大学や白梅学園大学の学生有志が、それぞれの取り組みで感じる課

* 客員研究員 白梅学園短期大学名誉教授

** 客員研究員 白梅学園大学名誉教授

題を共有し、コミュニティメンバーの経験や知識、つながりを生かして、地域の社会課題解決を目指すというものである。2023年度は、小平地域共創企画として、つながるまつり～障害のある子もない子も、多世代がまぜこぜで一緒にあそぼう会～が開催され、出張広場として参加（495名）するとともに、異彩たちのアート展でワークショップを実施した（169名）。また、小川ホームにて行われたおがワンフェスティバルにも参加した。

2. 成果と課題

教員は、「地域子育て支援演習」の授業をオムニバスで実施しながら学生たちの準備を支援した。リハーサル時には参加者の導線や安全面や遊びの内容について改善点をアドバイスするとともに、資料作りの支援、チラシやニュースの印刷なども教員が分担して取り組んだ。

昨年度授業を履修した2年生のうち数名は、今年度もGP学生委員として活動を継続している。また3,4年生の支援も毎回あり、広場開催で必要なアドバイス等を1年生に対して行うことができた。リハーサルや前日準備には必ず複数のOBが参加し、指導や支援をしており、上級生と学び合う関係性は続いている。

2004年にスタートした子育て広場の活動も20年の節目を迎える。この間に学生と地域との連携は確実に広がり、深くなっている。一方、コロナ禍以前には、教員、在学生、卒業生が定期的集まり懇談する機会を設けていたが、残念ながらコロナ禍以降中断している。これまでの活動を総括する機会を設け、今後も地域からの期待やニーズが応えつつ、学生が学ぶ場として充実していけるようにしたい。